

婦人小中婦系

和書門	一七六	一七六	一七六
類	一八一	一八一	一八一
函	一八一	一八一	一八一
架	一八一	一八一	一八一
冊	一八一	一八一	一八一

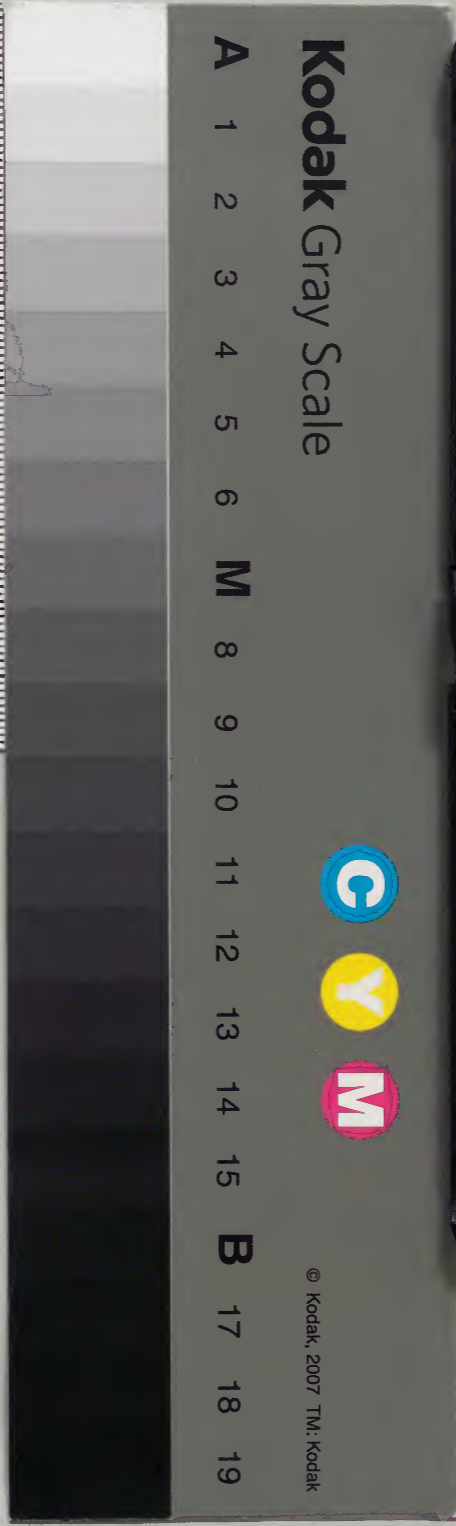
159

庫文閣内	和書
九五	七七六
函	一八一
架	一八一
冊	一八一
類	一八一

醫書一ノ三

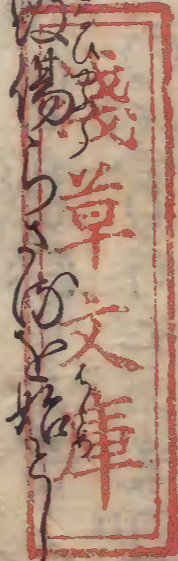
内閣文庫	
番號	和 17761
冊數	6 ( 1 )
函號	195 159

195-159



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

婦人孝順序



聖人孝と悦めよ身許髪膚と<sup>傷</sup>傷りつゝ<sup>始</sup>始と<sup>終</sup>終と<sup>一</sup>一  
 身と<sup>道</sup>道はれこ<sup>し</sup>し<sup>後</sup>後世の<sup>父</sup>父と<sup>母</sup>母と<sup>頭</sup>頭と<sup>心</sup>心と<sup>終</sup>終と<sup>一</sup>一  
 あり<sup>女</sup>女は<sup>孝</sup>孝なり<sup>親</sup>親も<sup>多</sup>多し<sup>中</sup>中に<sup>り</sup>り<sup>た</sup>た<sup>は</sup>は<sup>と</sup>と<sup>才</sup>才<sup>一</sup>一<sup>は</sup>は<sup>孝</sup>孝  
 三<sup>は</sup>は<sup>嗣</sup>嗣と<sup>り</sup>り<sup>と</sup>と<sup>安</sup>安と<sup>に</sup>に<sup>徳</sup>徳と<sup>の</sup>の<sup>一</sup>一<sup>と</sup>と<sup>孝</sup>孝なり  
 り<sup>親</sup>親<sup>の</sup>の<sup>れ</sup>れ<sup>と</sup>と<sup>せ</sup>せ<sup>ら</sup>ら<sup>道</sup>道<sup>れ</sup>れ<sup>と</sup>と<sup>り</sup>り<sup>所</sup>所<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>し</sup>し<sup>と</sup>と<sup>孝</sup>孝  
 一<sup>は</sup>は<sup>女</sup>女<sup>の</sup>の<sup>も</sup>も<sup>九</sup>九<sup>子</sup>子<sup>な</sup>な<sup>ら</sup>ら<sup>軍</sup>軍<sup>を</sup>を<sup>律</sup>律<sup>に</sup>に<sup>佛</sup>佛<sup>に</sup>に<sup>あ</sup>あ<sup>り</sup>り  
 運<sup>ひ</sup>運<sup>ひ</sup><sup>糸</sup>糸<sup>を</sup>を<sup>ひ</sup>ひ<sup>と</sup>と<sup>り</sup>り<sup>の</sup>の<sup>り</sup>り<sup>や</sup>や<sup>な</sup>な<sup>れ</sup>れ<sup>と</sup>と<sup>そ</sup>そ<sup>の</sup>の<sup>名</sup>名<sup>醫</sup>醫<sup>に</sup>に<sup>あ</sup>あ  
 付<sup>て</sup>付<sup>て</sup><sup>妻</sup>妻<sup>の</sup>の<sup>氣</sup>氣<sup>血</sup>血<sup>を</sup>を<sup>う</sup>う<sup>づ</sup>づ<sup>め</sup>め<sup>と</sup>と<sup>補</sup>補<sup>く</sup>く<sup>と</sup>と<sup>愈</sup>愈<sup>し</sup>し  
 芦<sup>垣</sup>垣<sup>の</sup>の<sup>も</sup>も<sup>ら</sup>ら<sup>う</sup>う<sup>と</sup>と<sup>結</sup>結<sup>と</sup>と<sup>ら</sup>ら<sup>ぶ</sup>ぶ<sup>と</sup>と<sup>い</sup>い<sup>や</sup>や<sup>女</sup>女<sup>の</sup>の<sup>徳</sup>徳<sup>の</sup>の<sup>ま</sup>ま  
 と<sup>い</sup>い<sup>ら</sup>ら<sup>る</sup>る<sup>り</sup>り<sup>て</sup>て<sup>分</sup>分<sup>は</sup>は<sup>ん</sup>ん<sup>と</sup>と<sup>い</sup>い<sup>は</sup>は<sup>る</sup>る<sup>も</sup>も<sup>と</sup>と<sup>孝</sup>孝<sup>の</sup>の<sup>徳</sup>徳<sup>に</sup>に<sup>あ</sup>あ

591-591



母にまゝしてとて〜後世も傳へば〜此  
予備の〜朋友も〜始終も〜  
〜に〜付〜命〜  
〜と〜檜麻の〜筆〜書は〜  
舊の〜つりて〜書の〜面付た〜  
せし〜人〜下跡〜  
急〜

豊前中津江  
坂部彌生書

婦人專草の言

一 け書婦人嗣より〜  
同の保書の書は〜  
唐とれ〜  
も〜  
と〜書は〜  
け書と〜  
後子あり〜  
に〜  
後裔と〜  
う〜

一 け書よと載るふり諸説もれ誰人か説何のや  
いふこととの世にこそ一として名後くは是  
とあり非と矯てありゆらに名ありまふ所  
とありこれより胸臆の私とありておきりにせ  
らるるるゆとありは  
一 求嗣り況産も後りは古書に載る不甚多  
ありきたるを脱長きれは是にむらに脱たり  
かきくを埋ぬふまれし明るは辨一かきけ  
とよ載らふにそり世俗日用よとありゆらあり  
りともありとありしむるなり  
一 諸の醫書よ求嗣産も後れ業方ありけとよ

一 出載せしむる世にといふよありは業方とあり  
りともあり世俗を痛と鑑して大きりに調合  
て服用しる言多しむることおれおれなり又  
を肉よとせ信用て書りたは業方とありゆと  
とありとしてと載たりぬ

一 け書文字と似るやらけうらおよとれは書  
訓とありとありしむるよはに後れは是は文  
理通一ありたおよと細考はけしてゆよとあり  
けりぬはとありしむるよはにけとありぬ  
一 け編る事とありしむるよはに編今よと或人れと  
めに無して集録しるゆらありしむるよはに短く

識拙くまして遠慮よるる言とてうらなはるる  
 推るる所の書及もその御しつとてうらなはるる人子  
 わらうとてふとれたもせ光再とてなれとれを  
 かしこく記しせしむるたもてあはちりていふ  
 一ゆりわけありと空才のふれをあらわす  
 うはそと世儀のまらよ復しうのまられとてゆり  
 人又むれいゆれとてあふとてなり考へて残るるの  
 流れれゆれとてあふとてなり考へて残るるの  
 こん縁に申す孟秋下注日  
 海和後学 貞菴香月啓蓋講

婦人壽草目録

卷上一

- 才一 求嗣の説 七丁ノ
- 才二 子なる者忌神と禱るれ説 十七丁ノ
- 才三 子なる者吏婦忌つる説 十九丁メ
- 才四 夫婦吏婦日時の説 廿丁メ

卷上二

- 才五 子と求るれ説 二丁メ
- 才六 子と求る業刑の説 四丁メ
- 才七 子と求る業得れ説 九丁メ
- 才八 受胎の説 十三丁メ

第九 胎胎此後

十八丁

卷中二

第十 胎胎の尻

一丁

第十一 妊婦念忘此後

六丁

第十二 妊婦茶忘此後

八丁

第十三 妊婦胎と胎子の尻

九丁

第十四 胎内の児男女と胎子の尻

九丁

第十五 胎内の児男女と胎子の尻

十丁

第十六 女と精して男となす此後

十三丁

第十七 妊婦腰腹と帯と胎子の尻

十五丁

第十八 胎胎此後

十七丁

卷中三

第十九 胎自墮此後

九六丁

第二十 妊婦胎下と帯産と胎子の尻

一丁

第二十一 胎の形體此後

四丁

第二十二 産月いまして産後と胎子の尻

四丁

第二十三 逐月胎と産と胎子の尻

八丁

第二十四 産前活法此後

十二丁

第二十五 妊婦産園禁親此後

十六丁

第二十六 産月よして産と胎子の尻

九二丁

第二十七 産後胎月よして父母の胎子の尻

九六丁

卷下

廿八 姪姪月極養の祝 一丁メ

廿九 難産の祝 四丁メ

三十 臨産の祝 七丁メ

卅一 臨産治法の祝 十九丁メ

巻下六

卅二 産後調護の祝 一丁メ

卅三 産後食治の祝 九丁メ

卅四 産後諸病の祝 十四丁メ

卅五 産後乳汁の祝 廿四丁メ

卅六 産後極養治法の祝 廿五丁メ

婦人本草白濁の祝

婦人本草巻上一

振前晩出

香月啓巻纂輯

① 求嗣の祝

○夫令の夫婦天地のまゝ、天地和合して万物まゝ、夫婦交媾

して男女生じ人おのれおのれをまねて生まるゝいづれもこれに

れう人よまよるる人のまのこころを道りそれらうせむ

有りたりといふ偏とつれもら君臣父子夫婦兄弟朋友

友たり志長の忠義と父子の教も兄弟の交誼も

朋友の信義もこれ夫婦ありてのちなりぬよ夫婦は

夫婦のよりなりといひ申高よも妻子の道は徳と夫婦は

道とす祝盃子の珍よし後後といふこと人おのれ孝





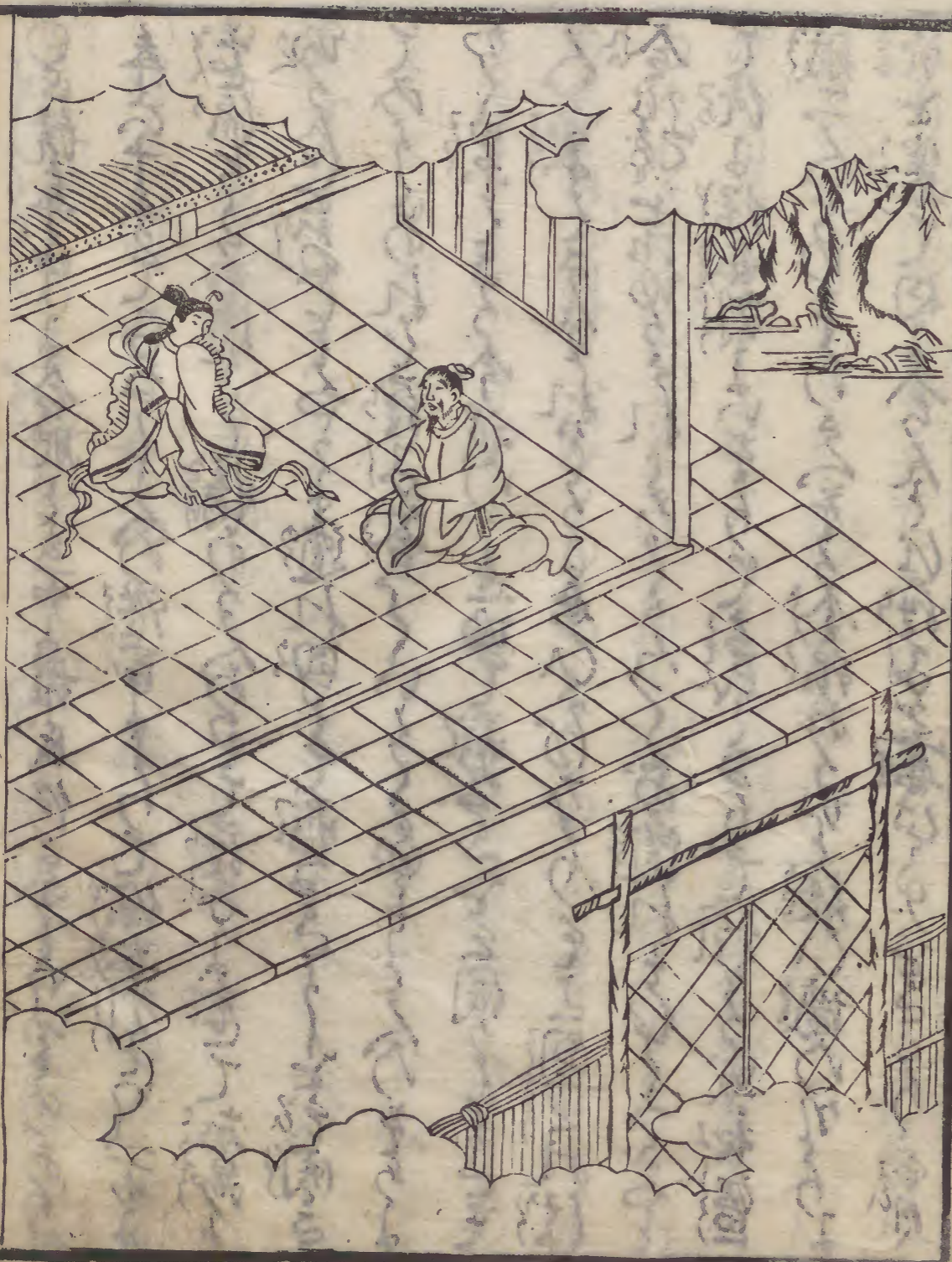


よきのいんもいんかきいんきりあつるなり かん朝  
よきいんもいんかきいんきりあつるなり かん朝  
よきいんもいんかきいんきりあつるなり かん朝  
よきいんもいんかきいんきりあつるなり かん朝  
よきいんもいんかきいんきりあつるなり かん朝  
よきいんもいんかきいんきりあつるなり かん朝  
よきいんもいんかきいんきりあつるなり かん朝  
よきいんもいんかきいんきりあつるなり かん朝  
よきいんもいんかきいんきりあつるなり かん朝  
よきいんもいんかきいんきりあつるなり かん朝

ありこれともいんかきいんきりあつるなり かん朝  
ありこれともいんかきいんきりあつるなり かん朝  
ありこれともいんかきいんきりあつるなり かん朝  
ありこれともいんかきいんきりあつるなり かん朝  
ありこれともいんかきいんきりあつるなり かん朝  
ありこれともいんかきいんきりあつるなり かん朝  
ありこれともいんかきいんきりあつるなり かん朝  
ありこれともいんかきいんきりあつるなり かん朝  
ありこれともいんかきいんきりあつるなり かん朝  
ありこれともいんかきいんきりあつるなり かん朝



任に侍録充滿子孫經學家とてつらつらりまはるる跡と云  
 人これに湖濱の一登別といふ所りなりとありて  
 毎日御金り飛人とありてそめ樹の御金とそめりて天  
 子よ奉伺して死罪とてごひつことあまのつらひ一日  
 ら跡なる申よいざらよの老翁の長冠をさしつて男  
 子と女子ととのくへつた右よさしつてさしつてに糸  
 してさしつてり着ていざらぬとて湖濱のさしつてりよ今  
 人と活とてあまのつらひとて天帝則これと感ありあひ  
 ぬよさしつてり男と女と一人とさしつていざらぬとてさしつて  
 めりてさしつてり女とて女とてさしつてり男とてさしつてり  
 邦みりてさしつてり男とて女とてさしつてり男とてさしつてり



○正統年中、合肥と云や、權氏何系と云ふものあり  
年六十まで子なく、人の傳言せりて、係安別と云ふ者  
を流さるる道とて、情の入りあつて、姪子と云て、名を  
ゆつたと云ふ事あり、道れ四とて、姪子と云ふ事あり、  
てみよとのれど、姪子と云ふ事あり、いふ事あり、人の事あり、  
かく累し、今我の事とて、情あり、いふ事あり、  
人、累と云ふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、  
今、我の事と云ふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、  
て、統、係安別と云ふ事あり、いふ事あり、  
賊二人との事あり、いふ事あり、いふ事あり、  
完と云ふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、

より、津湯と云ふ事あり、いふ事あり、  
つ、姪子と云ふ事あり、いふ事あり、  
次、目姪子と云ふ事あり、いふ事あり、  
あ、人の事あり、いふ事あり、  
ら、姪子と云ふ事あり、いふ事あり、  
ち、獲と云ふ事あり、いふ事あり、  
ま、死せり、事あり、いふ事あり、  
業、せり、事あり、いふ事あり、  
り、と、事あり、いふ事あり、  
○婦人の事あり、いふ事あり、  
皇、后と云ふ事あり、いふ事あり、

(今よかろるゆりなく唐土が船毎して婦人の忌憚り  
 それに聖人の立ぬまも婦に七種のさるゆあり妬むいふと云  
 りゆとよあまをさり佛教よも不成佛の者に種あり妬  
 妬り妬をひらなれし傷ねに戒しるゆに妬人妬人の  
 情物よこ心火の熾かじこころ火物と清滅するの理を  
 まし真澄り水と濁耗とこと一水必火よ勝たりといふ  
 ぬよ妬妬の物さるじこころさるじこころを必産する  
 と或は病とをさるじこころ多病よして忌憚り妬  
 乃常言れ妬よ天下和平なれぬ人そのゆんて子あり  
 と揚氏の妬よ妬人妬人の公よこころ内外和柔よして子  
 のるといふ事とらるるのといふさるる古人の説も妬物とらる

や薄徳するゆりの二軍 あたらしと後残りにカ二千五百人と軍といふ  
とあれは二軍中三カ七十人といふなり  
 平も奪いこむありといふ國房のゆに威ねるるゆのゆ  
 く智恵の六合 たはたは方と  
た合しと よあまのゆに淋粉よあつては  
 かそく首と物を眉とそれて妬人のそを先よとらるといふ難  
 妬りぬをさるるゆに妬人のあつてはひよりてあ  
 じくひをさるるゆに朝才一の好まを系りの何系も妙筒  
 の女に龍田心の奇よとらしてさあゆの星よゆにさるるゆ

中來とく書きて薬を用いて経水或は毎月の初より  
 前或は期より後れ或は経水下りてほいそりとするは皆  
 証なり又経水少りして或は清きもの血虚なり経水多り  
 もの血虚なり又経水多りんとて痛甚く或は凝塊して  
 せり血滞るるは経水の多き或は血滞りて熱とさして  
 せしむといふは此の病ありとすくたなりとすよりの醫  
 師も考て薬と服し経水とさのよとすも此といふは  
 時珍の説も経水の毎月一度ゆくもの常なり或は月二度  
 ゆくものありこれと若くは一年に一度ゆくものあり  
 これと避年と名づく一は生経水りてして胎とくくある  
 ありこれと暗經と名づくるなりとすなりとすなり  
 考今何





色すり多し〜これを書き置かれし常理とありて痛くは〜  
けりぬ物人いじまわらるれば流水の〜茶と脂  
と〜は〜

○丹溪の流しより〜

〜陽精と〜

〜賓客と〜

〜久く〜

○温徳の求嗣篇より〜

〜或は精虚を〜

〜射者力微弱〜

矢枉れぬ的あり〜

龍共廷賢の流し〜

○劉宗厚の流し〜

〜母の血の不足〜

〜肥地〜

物人經脈〜

〜齊地〜

○胡氏考は流し〜

〜男子〜

〜血と補〜

〜又これ〜

〜經脈と〜

志の若菜と書ゆして治療と加(史書)は疾痛なく百脈調  
よして公の志を承る母子と聲をばしりるるをこれ天下の  
男の子として父を承るものなく天下れ女人として母を承る  
んものありしやいづり識ありしやいづり世俗の地と  
ことし史書たるが係法よとむらひ公の心はなむらり  
續よとむらひとむらひとむらひのありんたるをいふはれは  
不孝婦として天性せしつらとむらひのありしやいづり  
と物人は海とまじり倭俗佛書のみ不孝女のありしやいづり  
生をのありしやいづり有業のありしやいづり則不孝書ありしや  
とらりくろのありしやいづり或る律法ありしやいづり考ゆるは  
も歴代ありしやいづりおよびるる一註して史書のありしやいづり

物人といふ史書のありしやいづりとんといふとむらひのありしやいづり  
婦といふとむらひのありしやいづり不孝女といふはれは  
靈樞經に地は樹草とせしやいづりありんといふはれは  
と合して流るるとれ則不孝女のありしやいづり一ケ松のありしや  
ふれはよとむらひといふはれは一これとて父母より受るたり  
血氣といふはれは一地を承るるとしてとむらひといふはれは  
地脈といふはれは一草とせしやいづり一古聖の伝はれは  
種といふはれは一あれはとて天地生るの系統といふはれは  
本草といふはれは一いづりいづり史書史書して子とせしやいづり  
ゆら一世間といふはれは史書たるはれはと係法といふはれは  
らよのありしやいづり一不孝婦と稱するはれは

あり世俗大醜夫婦の吏婦とぞ戯るのそくおれい嬉乱  
とぞとらなりおれい人吏婦別ありとあそびし又今因り  
人にほとれおこし酔てい房よつと怒とぞ精とつくはとあ  
よまうしめあか能く吏婦の流り保泰とつしと道よりま  
かひにゆきまをいひつりま

②子よりとる正神よりのり説

○ふゆいふ正神よりのりてみと役けそらる唐古朝  
おもいこのり経は天まをよ命とて海て高とじまじと註り  
まをの正なるり春分二月のまをの流らる辛氏の祀簡狄郝  
謀よりのまをの印とまをの簡狄これとあての則契とせり  
契の南向氏とるのりて天下とぞとそりともう邦謀

孫音謀と唐とて子を承るの祭とる正神よりの契の帝  
の時の大賢よりのりて司位と云大官よるとるも天下は政道とた  
ねるひの則設りて祀りる孔子大聖也又の叔梁紇厄丘  
といふの神よりのりそまひて生民ありてこのり大聖孔子  
と生るのふと史記よのせとらりをわとて伊豫也保の社  
朝在正神よりのりとくけてこふとせりおれと神の祀にほ  
え張りて楠男と八幡高りお男とが男哉治命三男と新  
蘇三郎とた付そまひつて古書よ載そりては二人の源おれ  
祀とて繁榮しそらるり諸人おれとるあなり楠の正成とそ  
又志まの思けりよのりて正成と役をれと多國と保と名  
付り中太事祀とるそりそりて又本朝也乃おれとて事

神人のくちまのりをも外唐を御代はる神は禊の禊  
 と後そらうのりあてかそかそらうと志をこたよと鬼谷と  
 あり九尾神はあつやを身のゆりいよとして真言と  
 くれと禊の河神も感通あつて孔子も丘のつら  
 とのあし聖廟の法承あつてもをさよと後道よかよひ  
 のつとそとを神やちしとあれも神といふをこり  
 あかよとしてりうとを神はゆいぬらうと或人のあよ  
 一はのたなるのつらむは神やちしとをさ  
 こよと世ははるいふとつらむは神やちしとをさ  
 のあれも佛はりのりなれとこれを神はつらうと  
 ちよとゆい浮き出づりしは後俗のちよと巫祝の教訓とむ  
佛神はつらむとの教訓とむ



りり柳とていりてあわしむる事あるべし  
しるり能くおぼしむる事

三子あり者史嬖情しこの説

○孝宣帝の御  
嬖とて二十七日より二十一日まで二十一日まで  
六十日後精と秘して史嬖とるはかたじけなく  
よき史會とて男女の血氣充ちてなる事  
ゆゑこれ一子奉命を久息多福徳智恵とて  
の流るる大徳とていふべし一筆の老ずあはれ  
とす世の人を生まれし産物とて精と秘して史の  
ゆゑ一子ありていふるは史嬖の史嬖なる事

男女とも精血清くして帝は深威の史嬖とて  
ゆゑこれ一子奉命を久息多福徳智恵とて  
或市人百姓とて産物とていふべし一日とて  
妻とも精血充ちていふ史會とて一子ありていふ  
と必ししゆる事とていふは史嬖の史嬖なる事  
ついでにいふ事

四史嬖史嬖の目録の説

○孫田の流るる子と求むると必し史嬖の目録と撰  
ゆゑ史會を命めり相生相旺の目録日陽河毎月の有りと  
推して 推して 推して 推して 推して 推して 推して 推して  
史會とていふ事とていふは史嬖の史嬖なる事



眞陰の腎水と意耗とともども日房然とすし午  
丁この日午はたはたされん程と戒しるなり  
後丙丁の日房然と禁とすしと金方と戒するは  
さるる倭治丙午の男と女とすし午の女男と  
とすしとすしとすしと

○甲子の日と禁するもの甲子も属して夫の陽干の  
始なり此の日は秋の始なりとて本は秋の始なりとす  
属して地の濕の始なり此の日は土の始なりとて本は土の始なりとす  
月冬の一陽来復とて陰の始なり此の日は冬の始なりとて本は冬の始なりとす  
日と始とて曆とすしと曆とすしと

天比り守候の運約日月れ融およそすまてのまのく考  
るる中甲子もすしとすしとすしとすしと  
下下と命して大なり妙用とすしとすしとすしと  
と始じて通達前編若帝の紀よのせをりかやりのな  
りして方物の始て生ゆる時なれし日房然とすしと  
んりせしと陽字とすしとすしとすしと  
○庚申の日と禁するの道藏経より書よ庚申の日を齊  
戒体活し心身と清浄とすしとすしとすしと  
あやまのきと庚申とすしとすしとすしと  
の思わりのいまは人の眼とすしとすしとすしと  
と天帝とすしとすしとすしとすしと

うーと載そりり<sup>ツヤ</sup>なり<sup>ツヤ</sup>そ<sup>ツヤ</sup>も<sup>ツヤ</sup>は<sup>ツヤ</sup>古<sup>ツヤ</sup>ら<sup>ツヤ</sup>り<sup>ツヤ</sup>ひ<sup>ツヤ</sup>り<sup>ツヤ</sup>傳<sup>ツヤ</sup>り<sup>ツヤ</sup>て<sup>ツヤ</sup>も<sup>ツヤ</sup>ら<sup>ツヤ</sup>之<sup>ツヤ</sup>  
 然<sup>ツヤ</sup>中<sup>ツヤ</sup>之<sup>ツヤ</sup>主<sup>ツヤ</sup>も<sup>ツヤ</sup>の<sup>ツヤ</sup>傳<sup>ツヤ</sup>は<sup>ツヤ</sup>法<sup>ツヤ</sup>は<sup>ツヤ</sup>附<sup>ツヤ</sup>合<sup>ツヤ</sup>し<sup>ツヤ</sup>て<sup>ツヤ</sup>わ<sup>ツヤ</sup>り<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>夢<sup>ツヤ</sup>の<sup>ツヤ</sup>告<sup>ツヤ</sup>り<sup>ツヤ</sup>  
 と<sup>ツヤ</sup>し<sup>ツヤ</sup>を<sup>ツヤ</sup>好<sup>ツヤ</sup>む<sup>ツヤ</sup>ゆ<sup>ツヤ</sup>の<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>猿<sup>ツヤ</sup>回<sup>ツヤ</sup>差<sup>ツヤ</sup>の<sup>ツヤ</sup>神<sup>ツヤ</sup>明<sup>ツヤ</sup>は<sup>ツヤ</sup>附<sup>ツヤ</sup>合<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>是<sup>ツヤ</sup>幸<sup>ツヤ</sup>よ<sup>ツヤ</sup>  
 積<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>申<sup>ツヤ</sup>や<sup>ツヤ</sup>訓<sup>ツヤ</sup>通<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>ら<sup>ツヤ</sup>も<sup>ツヤ</sup>ら<sup>ツヤ</sup>て<sup>ツヤ</sup>る<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>都<sup>ツヤ</sup>鄙<sup>ツヤ</sup>た<sup>ツヤ</sup>は<sup>ツヤ</sup>庚<sup>ツヤ</sup>申<sup>ツヤ</sup>  
 の<sup>ツヤ</sup>堂<sup>ツヤ</sup>社<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>建<sup>ツヤ</sup>之<sup>ツヤ</sup>家<sup>ツヤ</sup>毎<sup>ツヤ</sup>も<sup>ツヤ</sup>り<sup>ツヤ</sup>人<sup>ツヤ</sup>毎<sup>ツヤ</sup>も<sup>ツヤ</sup>好<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>婦<sup>ツヤ</sup>人<sup>ツヤ</sup>忌<sup>ツヤ</sup>ま<sup>ツヤ</sup>を<sup>ツヤ</sup>  
 神<sup>ツヤ</sup>仏<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>し<sup>ツヤ</sup>て<sup>ツヤ</sup>尊<sup>ツヤ</sup>敬<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>ら<sup>ツヤ</sup>り<sup>ツヤ</sup>浮<sup>ツヤ</sup>島<sup>ツヤ</sup>巫<sup>ツヤ</sup>祝<sup>ツヤ</sup>の<sup>ツヤ</sup>形<sup>ツヤ</sup>象<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>  
 馬<sup>ツヤ</sup>一<sup>ツヤ</sup>條<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>う<sup>ツヤ</sup>ら<sup>ツヤ</sup>め<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>は<sup>ツヤ</sup>ご<sup>ツヤ</sup>て<sup>ツヤ</sup>市<sup>ツヤ</sup>街<sup>ツヤ</sup>よ<sup>ツヤ</sup>出<sup>ツヤ</sup>て<sup>ツヤ</sup>を<sup>ツヤ</sup>い<sup>ツヤ</sup>ひ<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>れ<sup>ツヤ</sup>て<sup>ツヤ</sup>  
 世<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>何<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>ら<sup>ツヤ</sup>財<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>じ<sup>ツヤ</sup>り<sup>ツヤ</sup>啓<sup>ツヤ</sup>首<sup>ツヤ</sup>扱<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>ら<sup>ツヤ</sup>は<sup>ツヤ</sup>庚<sup>ツヤ</sup>公<sup>ツヤ</sup>申<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>又<sup>ツヤ</sup>  
 金<sup>ツヤ</sup>金<sup>ツヤ</sup>克<sup>ツヤ</sup>本<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>て<sup>ツヤ</sup>金<sup>ツヤ</sup>六<sup>ツヤ</sup>能<sup>ツヤ</sup>本<sup>ツヤ</sup>よ<sup>ツヤ</sup>の<sup>ツヤ</sup>本<sup>ツヤ</sup>八<sup>ツヤ</sup>雲<sup>ツヤ</sup>の<sup>ツヤ</sup>何<sup>ツヤ</sup>は<sup>ツヤ</sup>屬<sup>ツヤ</sup>し<sup>ツヤ</sup>て<sup>ツヤ</sup>致<sup>ツヤ</sup>  
 生<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>ま<sup>ツヤ</sup>ら<sup>ツヤ</sup>人<sup>ツヤ</sup>の<sup>ツヤ</sup>生<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>の<sup>ツヤ</sup>陽<sup>ツヤ</sup>句<sup>ツヤ</sup>や<sup>ツヤ</sup>致<sup>ツヤ</sup>生<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>そ<sup>ツヤ</sup>ら<sup>ツヤ</sup>り<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>舟<sup>ツヤ</sup>渡<sup>ツヤ</sup>を<sup>ツヤ</sup>  
 の<sup>ツヤ</sup>天<sup>ツヤ</sup>び<sup>ツヤ</sup>人<sup>ツヤ</sup>よ<sup>ツヤ</sup>あ<sup>ツヤ</sup>ら<sup>ツヤ</sup>れ<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>世<sup>ツヤ</sup>と<sup>ツヤ</sup>生<sup>ツヤ</sup>ひ<sup>ツヤ</sup>ら<sup>ツヤ</sup>り<sup>ツヤ</sup>の<sup>ツヤ</sup>あ<sup>ツヤ</sup>ら<sup>ツヤ</sup>れ<sup>ツヤ</sup>人<sup>ツヤ</sup>び<sup>ツヤ</sup>火<sup>ツヤ</sup>よ<sup>ツヤ</sup>











あしふてん  
たか入西又唐の紙

Handwritten text in a cursive style, possibly a letter or document, enclosed in a rectangular border. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. There are two red square seals stamped on the page, one near the top center and another near the top right. The text is arranged in several vertical columns, reading from right to left.

